

Title	DISCUSSION : ELSIというビッグウェーブ、乗り越なせるか？のみ込まれるか？
Author(s)	朱, 喜哲; 工藤, 郁子; 岸本, 充生 他
Citation	ELSI VOICE. 2023, 4, p. 14-25
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/89934">https://doi.org/10.18910/89934</a>
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# DISCUSSION:

## ELSIというビッグウェーブ、

## 乗り越えさせるか？

## のみ込まれるか？

朱 喜哲 × 工藤 郁子 × 岸本 充生 × 八木 絵香



### 岸本 充生 (きしもと あつお)

大阪大学社会技術共創研究センター(ELSIセンター)センター長  
/データビリティフロンティア機構 教授

京都大学大学院経済学研究科博士後期課程修了。博士(経済学)。通産省工業技術院資源環境技術総合研究所(2001年から独立行政法人産業技術総合研究所)、東京大学公共政策大学院を経て、2017年から大阪大学データビリティフロンティア機構 教授。2020年4月から現職。共著に『基準値のからくり』(講談社ブルーバックス)、編著に『リスク学事典』(丸善出版)ほか。専門はリスク学。



### 八木 絵香 (やぎ えこう)

大阪大学社会技術共創研究センター(ELSIセンター)  
/COデザインセンター 教授

早稲田大学大学院人間科学研究科修了後、民間シンクタンクにおいて、災害心理学研究に従事。2002年から、東北大学大学院工学研究科博士後期課程に社会人大学院生として在籍。博士(工学)。社会的にコンフリクトのある科学技術の問題について、立場や利害の異なる人同士が対話・協働する場の企画、運営、評価を主な研究テーマとしている。著書に『続・対話の場をデザインする -安全な社会をつくるために必要なこと』(大阪大学出版会)など。

## コロナ禍対応アプリ「COCOA」とELSI

**八木** ここからは工藤さんと朱さんのお二人と ELSI センターの関わりを振り返りながら展開していきたいと思います。

**岸本** 最初に朱さんと出会ったのは 2019 年 3 月でしたね。その後、2019 年 9 月から電通さんと大阪大学データリテリフロンティア機構との間で「データビジネス ELSI 研究会<sup>※8</sup>」という産学共創プロジェクトを組織し、そこにさまざまなアカデミアとビジネスの方々をお呼びして ELSI とデータビジネスはどう関わるべきかについて議論を始めました。

その最初の成果が同年 12 月に開催した「イノベーションストリーム KANSAI」というイベントでのシンポジウム<sup>※9</sup>でした。「ELSI 対応なくして、データビジネスなし」という思い切ったタイトルをつけたので、ビジネス界からの反響も大きかったと思います。

**朱** あの時私が感じたことは、データビジネスは事業者側も結構不安を抱えて取り組んでいるということでした。データビジネスは今やすごく複雑な仕組みになっていて、ユーザーにはなかなか理解が難しいんじゃないかと一市民としても思っていましたし、まして先行きが見通せない事業に対しては、誰も守りに入ってしまいがちです。それだけに、悩み事を共通事項として同じ組上に載せ、包み隠さず話し合っていくことで建設的な方向性を見出そうというのが「データビジネス ELSI 研究会」のそもそもの主旨でした。実際、こんなデータがあるけれど扱い方に困っているとか、こんなルールを自分たちで決めてやってみてはいるけれどこれでいいのだろうか、といった話を率直に話してみると、答えがすぐに出るわけではありませんが、ビジネス側とアカデミア側相互の不信感や警戒感のような部分が徐々に解消し始めました。研究者が持つ知見を信頼して相談できる場所がアカデミア側にもあると感じてもらえたことが大きな成果だったと思います。

【※8】大阪大学 ELSI センターの産学共創研究プロジェクトの一つ。2019年9月に電通とELSIセンター(当初はデータリテリフロンティア機構)のメンバーで立ち上げられた。詳細は、<https://elsi.osaka-u.ac.jp/research/1027>

【※9】開催概要は、<https://www.osaka-u.ac.jp/ia/event/2019/12/8537>

**岸本** 僕も同様の印象を持っています。アカデミアの中だけで議論すると、

いまだに ELSI はビジネスにとってブレーキなのかもしれない、と思ってしまうんですよ。ところがビジネス界では、まさにこのタイトルどおりの「ELSI 対応なくして、データビジネスなし」を、皆さん体感として理解しておられます。これに関連して電通さんの情報サイト「電通報」で朱さん対談<sup>※10</sup>をさせていただき、その最後に「攻めの ELSI とは何か」という議論をしましたね。

**八木** その後、2020 年 4 月に ELSI センターが発足し、朱さんと工藤さんに招へい教員になっていただきました。

**岸本** ELSI センターでは研究成果を速報的に公開できるよう「ELSI NOTE」という媒体を設立当初からつくっており、工藤さんとはその No.4 で「接触追跡技術と ELSI に関する 10 の視点 ver.0.8<sup>※11</sup>」という文章を一緒に発表しました。これがセンター発足直後の 2020 年 4 月 30 日のことで、その後何度か加筆修正を加えて、6 月には ver.1.0 まで更新しています。タイトルの「接触追跡技術」はまさしくコロナ禍の中で生まれた接触確認アプリ COCOA<sup>※12</sup>のことで、10 の視点としていますが、項目としてはさらに細分化して数十にも及んでいます。特徴としては、10 の視点の 5、6、7 番目あたりはプライバシーやセキュリティの話ですけれども、1 から 4 と 8 から 10 は、普通は視野の外に置かれるような広い意味でのガバナンスの話になります。

当時を振り返りますと、とんでもない突貫工事で発表した文章でしたが、結果的にいいタイミングでしたね。すぐに個人情報保護委員会からコメントが出て認知度が高まっていき、接触確認アプリに関する仕様書などが公表された後に ver.0.9 を出し、COCOA のアプリ初期試行版がリリースされた 6 月 19 日の前日にはすでに ver.1.0 を出していました。

**工藤** いま思い返しても非常に柔軟かつ迅速に対応できたと思います。COCOA のように社会的関心が非常に高く、影響力も大きいものに対して機敏に反応し、政府の施策に対しても第三者的なアカデミアの

【※10】対談「ELSI 対応なくして、データビジネスなし?! 話題の ELSI とは」は 2020 年 2 月 7 日掲載。詳細は、<https://dentsu-ho.com/articles/7123>

【※11】<https://elsi.osaka-u.ac.jp/research/443>

【※12】COCOA は「新型コロナウイルス接触確認アプリ」の略称。厚生労働省がスマートフォンの近接通信機能 (Bluetooth) を使って新型コロナウイルス感染症の陽性者と接触した可能性を通知するアプリで、2020 年 6 月 19 日から運用が開始された。

立場から再検討できたことは、それなりに意義深かったと思います。  
早く出したからこそ意義があったんですね。

**岸本** ヨーロッパだったら、アカデミアに限らず NPO や各種の研究機関などがバンバン反応しますが、日本はそういう主体がなかなかないですね。

**朱** いまのお二人の話は、今日の結論めいた話の一つだと思います。中間団体のロビー活動においてどんな道筋をとるのか、全体の構造の話ではないでしょうか。

**工藤** そうですね。ELSI といっても、ただ一つの価値や答えがあるわけではないですからね。それぞれが自らの ELSI 的観点を大事にしながら進めるのですけれども、外側からもチェックをして悪いところは指摘してほしいという考えは、政府のみならず企業の皆さんもお持ちだと思うのです。そうやって気になる部分を、指摘したり牽制したりし合う役割をそれぞれ分担しながら、より健全な形を模索したり均衡を図っていくのが本来あるべき姿だと思います。

**岸本** 世の中にどの程度役立ったかはともかく、COCOA は新しい科学技術が社会実装される非常に端的な例でした。通常の企業の話でなくて、パブリックな話だったこともあって経緯がはっきりと見えていたので、我々も突っ込みを入れやすかったですし、今後に向けての良い練習になったと思います。

## 倫理問題への対応を担うのは誰か

**岸本** 企業において倫理的問題に対応するのは誰か、ということはよく議論されるのですが、先ほど朱さんは経営や人事の部門ではないかとおっしゃいましたね。工藤さんはどう思いますか。

**工藤** いわゆる倫理を担当する専門部署や専門の方が企業の中にはおおよ

そいっらっしやらないという認識は、全くそのとおりだと思います。そういつた中で、日本では社是とか会社のミッションの中に倫理を読み込み、それを押し広げていく者として経営企画の方や場合によっては人事の方が担当するという見立てでもそのとおりだと思いました。

朱さんに伺いたいのは、こうした状況はまだ過渡的なもので、いずれは朱さんも言及された海外の事例のように、チーフ・エシックス・オフィサーと呼ばれる倫理の専門家が尊重され、専門の部隊が生じる形になるのか、それとも日本は独自の形として、人事の方が浸透させていくのか、あるいは経営者の方が考えていくことになるのか。今後の見通しをお聞かせください。

**八木** 合わせて私も伺えますか。倫理的な問題は本質的には経営に関わることだと私も思いますが、経営の軸とタグづけて何を発信し、どのように顧客や社会と向き合うかというところで、広報とも関係しますよね。そのあたりのことも含めてコメントをいただけますか。

**朱** 日本の多様な企業の状況を一概には語れないことを前提としてお話ししますと、さまざまな企業に接する経験の中で見えるのは、企業内には全体的にセクショナリズムのようなものがありながらも、近年はESG (Environment, Social, Governance) やSDGsの観点から、互いに切り離すのはよくないということが共通認識になってきています。倫理という既存の部署だけでは扱えない理念的なものを、企業はいわゆるメセナとして形にするのではなく、本業において反映させねばならない。生産過程や流通過程においても気を配らねばならなくなっているのです。

それについては皆理解しているのですが、そこに首尾一貫したものを求めると、どこの部署が責任を持つのかという話になります。結果的に、それぞれお見合い的になってしまう場合もあれば「攻めのELSI」の姿勢をとる場合もあります。「攻めのELSI」という言葉は、一時期はやっていた「攻めの法務」という言葉に着想を得たもので、事業にブレーキをかけるような保守的な法務ではなく、提言したり事業に寄

り添ったりしていくものでした。

そういう意味では法務の部署もどんどん専門性を拡大して、PR 対応あるいは IR や株主対応のプレゼンテーションを弁護士事務所がサポートするような形で踏み出してきているし、広報の部署もコーポレイトッドコミュニケーションと商品戦略やマーケティングとの首尾一貫性を考えるような形で踏み出してきている。それぞれの部署が少しずつ踏み出し始めてはいるけれども、倫理的な観点にピンを立てた部署や人員配置が成立するかというと、日本の場合は難しいのではないかと。可能性としては経営的な観点からしかないと私はみています。

**岸本** 問題の立て方としては、セクションではなくガバナンスの話ですね。倫理の部署がいるかいないかという問題ではなく、L (Legal = 法的課題) から S (Social = 社会的課題) まで含めて ELSI として横断的に見るプロセスを確立できるかどうかの問題なんだと思います。例えば、立派な倫理学者を雇用して倫理の部署のトップに据えても機能しないでしょう。では、誰がプロセスをきちんと確立できるかといえば、やはり経営層だろうと僕も思います。

## 「監修」ではなく「共創」を

**岸本** 一方で、実際にプロセスを担保するのは非常に難しいことです。消費者や市民、その他いろんな人たちの意見をどう集約するかは難しい話で、例えば Google が倫理学者を解雇したことが最近問題になりましたし、その少し前にも第三者委員会をつくらうとしてうまくいかず1回も開催されずに解散したということもありました。

じつは僕も今、大学内の第三者委員会の運営に関わっているのですが、その設計は難しいものがあります。まず人選。メンバーにどんな権限を持たせるのかを考えると、結局、怖いことを言わなそうな人を選びがちですね。これが何の話につながるかというと、先ほど朱さんの話にてたエシックス・ウォッシングの問題です。形だけの ELSI

対応によって自分たちを正当化してしまう危険性は、ELSIの研究や実践をする者にとって本質的な問題で、どういう立ち位置をとるか、絶妙なバランス感覚が求められるのです。

八木さんはリスクや安全を考える分野で同じような経験をされてきて、そのあたりどう感じておられますか。

**八木** 私の分野では、アカデミア側は総じてウォッシングと逆のほうに立ちます。要は原則論で、「これは危ないよね」「やっぱりだめだよ」となりがちです。当然批判も大事ですが、それはある意味いくらでも言えるわけで、実際に物事を決定し進めていかねばならない企業側の「その批判はわかるけれども、じゃあどうしたらいいの?」という問いかけに我々は十分答えてこられなかったという反省点もあります。それが最初に朱さんがおっしゃった、学者に相談するのに何となく警戒感を持ってしまうところにつながっているんじゃないでしょうか。

**朱** 今のコメントはおもしろいですね。逆に企業の側からアカデミアに手前勝手なことを求める、言うなれば「お墨付きがほしい」というような話もあり得るわけです。例えばPマーク<sup>※13</sup>のような制度に対して「どういう基準を満たせば認定してもらえますか」と問われた場合、「倫理の観点からこういう基準を満たしたら大丈夫」などと具体的に言える研究者はまずいないことは、企業側も重々承知だと思います。それなのに結局ご指摘のようになってしまうのは、相互のやりとりの回数が少ないからだと思うのです。「こういうものでどうでしょうか」と企業が投げかけたものに、研究者が原則論で「これはだめだよ」と突き返したりブレーキをかけたりした時点で議論が終わってしまうからなんです。

1年間データビジネス ELSI 研究会を一緒にやらせていただいていたのは、原則論がでたときに、それに照らしてどんな運用ができるのかを実務者レベルで話しあえたことでした。このいわゆるチューニングのプロセスがとても大事で、従来ありがちな「専門家による監修」ではないところだと思います。チューニングがうまくいくと、研究者側

【※13】プライバシーマークの略称。個人情報の保護のための方策として通商産業省(経済産業省)の指導のもと1998年から運用されている第三者認証制度。



もアカデミアの中で批判されても反論できるし、逆に企業側も持ち帰った案件を事業責任者に対してなぜこういう判断をしたのかきちんと説明ができる。そのコミュニケーションの頻度と密度を上げることで問題は解決するのではないのでしょうか。

**岸本** 「監修」ではなく「共創」をすべきだということでしょうか。ただ、我々としてもやりとりの回数や深度が増すとそれなりに大変で、どこまで尽力できるかという現実的な問題も出てきそうですね。工藤さんはどう思いますか。

**工藤** まずエシックス・ウォッシングのような第三者機関が関わる際の難しさについてですが、もともと私の専門である法律・法学の分野においては同じ問題がすでにあります。つまり何か不祥事が起きたときには、検察官や弁護士など主に法曹の方が事故調査委員会などの第三者委員会を組織して事実関係を調べ、それに対して評価を行い、報告書を出すという一連のプロセスがあるのですが、その際に企業にとって有利に見える報告書や甘い報告書が出されたり、逆に取り込まれてしまったり、さまざまな問題点が指摘されています。それに対しては、弁護士会など業界団体として職業倫理をめぐるガイドラインが出され、ある程度の統制がはかられている状況にあるので、おそらく ELSI においてもこういった先行の取り組みが参考になると思います。

翻って、2点指摘しておきたいのですが、1点目は、特に倫理に関する業界団体や職業団体がないがゆえに、統制が効きにくいこと。誰が担当しているのかわからないという問題があると思います。

2点目として、事故調査や不祥事の研究を進めていくと、個人の責任ではなく仕組みや構造、いわゆる企業風土や企業文化がよくなかったというところに行き当たりがちです。これは本来、法律家より倫理学者などの領域の問題だと思うのです。朱さんの話にもあったように、法律家が専門分野から拡張した領域まで頑張っている側面があるので、そこに例えば倫理学者や人類学者が加わったりすると、もう一段階層の高い議論や検証ができるんじゃないかと思います。

**岸本** それは僕も最近感じています。朱さんや工藤さんのネットワークを通じてたくさん倫理学者、社会学者、人類学者の方々に会うと、データビジネスも含めた現実の問題に皆さん、特に若い人たちはすごく関心が高いことがわかりました。意外なことでもありましたが、工藤さんが指摘された点も含めて、多くの専門家の活躍の場が広がっているように思います。

## 「攻める」ELSIと、「創る」ELSI

**岸本** ここで今一度「攻めの ELSI」という言葉に関してどんな概念か、お二人に聞いてみたいと思います。

**朱** さきほど「攻めの法務」からの類推として、ELSI がブレーキを踏むという一般のイメージに対して「そうじゃない」という話があったのですが、じゃあアクセルを踏むのかというと、そういう話でもないところが肝かなと私は理解しています。

つまり、市民あるいはユーザーに対してデータビジネス事業者が今まで直接対話をしてこなかったということが問題で、まず「自分たちはこんな価値観に立脚して、こういうことがやりたいから、皆さんのデータを使ってこんなビジネスをしようとしているんです」ときちんと伝えることを「攻め」の観点だと私は理解しています。単にクレーム対応として後でやることを「守り」、リスク対応として先にやるのが「攻め」なのではなく、まず自分たちの意思表示をする。そのときには専門家の助言も必要かもしれないけれど、まずは自分たちからわかりやすく説明しなければいけない。それを「攻めの ELSI」と言いたいですね。

**工藤** 私はまだ「攻めの ELSI」とか「攻めの法務」という言葉を十分理解していないところがある気がしますが、特徴的だと感じたのは、先ほどの「監修」ではなくて「共に創る=共創 (co-creation)」という話です。八木先生が反省されていた批判的な立場や第三者的な立場からのアドバイスやコメントではなく、自分も当事者あるいは同じチー

ムの一員として貢献するという姿勢が「攻め」のニュアンスに近いと思います。

ただし、それは場面によって良いところと悪いところがありますね。例えば事故が起きてしまったときは、ある程度距離をとって第三者的な立場から客観的に物事を考えて指摘するという役割が重要ですし、逆に新しい製品やサービスの開発場面においては、当事者の立場で考えてアドバイスをしたり、場合によっては一緒に創りあげていったりすることが重要になる。これはチームの中では攻めも守りも必要な場合があるという役割分担の話ですが……。

**岸本** 僕は以前勤めていた産業技術総合研究所で「攻めのリスク評価」という文書を書いたことがあります。これも安全性への懸念が指摘されてからあわててリスク評価をするのではなく、開発した技術を社会に出すと同時にリスク評価の結果も出す、言わば一体的な機能としてみることを提案したものでした。例えば新規の材料や技術が出てきたときに、その機能の良さの一つに安全性などのリスク評価を加えるのです。そういう意味で「攻めのリスク評価」という言葉を使ったんですけれども、今回もその概念を使って「攻めの ELSI」とうたってみました。

一方で、例えば「攻めの技術開発」とは言いませんね。技術開発は基本的に攻めの姿勢ですから。この技術開発と並行して社会技術の開発も進めていけば、いずれは「攻めの ELSI」などと言わなくても最初からパイ・デザインとしてある、あるいは ELSI を考えるのが当たり前になる時期も近いかもしれません。そういう意味で、今は過渡期とも捉えられます。

**八木** 私は「攻める」というより工藤さんがおっしゃった「創る」の方がしっくりくるように思いました。あるものを受け止めるとか、何かの対応をするのではなく、「ELSI って何か、新たに考えて創っていきましょう」というのが、このシリーズに通底していた議論であり、攻めや守りを超えた新しい概念のように感じました。

**岸本** 新しい言葉や概念を創っていくのも人文学的なイノベーションだと思いますので、今後ぜひ考えていきたいと思います。

**八木** もう一つ、朱さんのお話に引きつけて言いますと、1回目のゲストのLBMA Japanさん<sup>※14</sup>も2回目のゲストのメルカリR4Dさん<sup>※15</sup>も、ELSIに落とし込んで、社会において自分たちの会社がどうありたいのかという意味を示そうとしているようにみえたのが非常に興味深いことでした。一般にビジネスとはお金儲けをすることで、企業は自らの利益を追求する組織だと思われがちですね。もちろんその通りなのですが、皆さん企業活動を通じて社会をどう良くしていきたいのかという志のようなものが原点にあることで、それを体現するのにELSIという概念を活用しようとされていたことが印象的でした。

## ELSIの波を乗りこなす術

**岸本** 最後に、今回のテーマでありますELSIという波を「乗りこなせるか、のみ込まれるか」というところについて、我々としてはのみ込まれ過ぎずにうまく乗りこなしたいのですが、そのためにどうすればいいか一言ずつお願いできればと思います。

**朱** きょう改めて確認したのは、のみ込まれないためには個々人の属人的な対応にならないこと。例えば倫理学者一人に頼るとどうしても個人の限界が出てくるので、なにかしら制度化して組織的なものをつくる必要があります。倫理において難しいのは、ライセンス的なものがまだ社会的に制度化されていないことで、それについてアカデミア側からなにか形式化を提案することは考えられると思います。

同時に、それが第三者委員会や社内倫理委員会の委員に就任するといった既存のシステムにのみ込まれる形ではないことも重要です。研究者が企業に属するでもなく、アカデミアの中だけで活動するでもなく、ロビー活動なども含めて政策提言をしたり、中間回路をうまくつないだりすること。それがのみ込まれずにバランス良く乗りこなすためのピン

【※14】ELSI VOICE No.2を参照。

【※15】ELSI VOICE No.3を参照。

トかと思います。

**工藤** 倫理や価値に関わる話をする、多くの方がわりと斜に構えるような気がします。「ESG ね。いいと思うけどね」とか「SDGs も大切だよね。わかるんだけど自分とはちょっと関係ないかな」といった反応が多いです。でも、そうやっているといつか足元をすくわれてのみ込まれてしまうので、むしろマウントを取って「大切ですよね。ちなみに私はここが大切だと思うんですけど」というような投げかけや改善を重ねていくこと。そして新しい概念をつくり、自分の信じる価値を持ち込んでいくことが乗りこなすためには重要だし、のみ込まれないための予防策でもあると思います。「攻撃は最大の防御」と申しますが、そういう姿勢が大事ではないでしょうか。

**岸本** 僕の希望は人文社会科学、特に人文科学の産学共創を行政も含めて進めたいですね。大学の中で産学共創というと、これまでほぼ工学や医学においてのことでしたから、人文社会科学での ELSI 関連の産学共創の余地はたくさんあります。そういう意味でアカデミアはお墨付きを与える役ではなく対等に共創していく、あるいは我々の価値観を皆さんに知っていただき浸透させるといったような産学共創を進めていきたい。それを行政にも広げていければ波をうまく乗りこなすことができるんじゃないかと思っています。

**八木** ELSI センターの正式名称である「社会技術共創研究センター」には、じつは ELSI に当たる日本語が全く入っていません。設立の際、通称の「ELSI センター」の方が先に決まっていて、それに対応させる日本語の候補はほかにもたくさんあり、それこそ「科学技術に関する倫理・法・社会研究センター」という直訳そのままの候補もありました。ところが鶴の一声で「共創」という言葉が入ったのは「なるほど、こういうことだったのか」と腑に落ちました。本日はありがとうございます。